

2016年8月25日／浪宏友ビジネス縁起観塾／

釈尊の工夫

1. 概要

(1) 資料

増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫(p.484)／詩(偈)のある経典群／梵天相應／勧請

(2) 主題

成道した釈迦牟尼世尊が説法を決意するまでの経緯を学んでみたいと思います。

2. 悟りがたい法

(1) 経文

「かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、ウルヴェーラー（優留毘羅）村の、ネーランジャラー（尼連禪）河のほとりなる、アジャパーラ・ニグローダ（阿闍波羅尼俱律陀）の樹下に住しておられた。はじめて正覚を成じたまいし時のことであった。

その時、世尊は、孤坐（こざ）の思索のなかにおいて、つぎのような思いを起された。

『わたしが証（さと）りえたこの法は、はなはだ深くして、見がたく、悟りがたい。寂静微妙にして思惟の領域をこえ、すぐれたる智者のみのよく覚知しうるところである』」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.484）

(2) 釈迦牟尼世尊の悟った法

釈迦牟尼世尊は、尼連禪河のほとりで独り坐し、悟ったばかりの法について、思索を巡らしていました。

釈迦牟尼世尊の悟った法は、「はなはだ深くして、見がたく、悟りがたい」ものでした。そして「寂静微妙にして思惟の領域をこえている」ものでした。

(3) 思惟の領域をこえた法

① 妙法蓮華経の如来寿量品の最大の要点を、庭野日敬師は次のように述べています。ここに、釈迦牟尼世尊の悟りの内容が示されていると思います。

「もしわれわれが、いつも『自分は久遠実成の本仏に生かされているのだ』という自覚を深くもち、『久遠実成の本仏に生かされているかぎりには、そのみ心のおりに生きることが正しい生き方だ』という明快な真実を悟り、本仏のみ心にもとづいて説かれたお釈迦さまの教えにしたがって生きてゆきさえすれば、つねに大自信をもった生活ができ、人生苦などはあってもなきにひとしくなってしまうのです」（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社、p.169）

② 釈迦牟尼世尊が、アジャパーラ・ニグローダの樹下で悟った法とは、ここにある「自分は久遠実成の本仏に生かされているのだ、久遠実成の本仏に生かされているかぎりはそのみ心とおりに生きることが正しい生き方だという明快な真実」であったにちがひありません。この真実は、まさしく、思惟の領域を超えていますし、ことばに表現できるものではありません。

(4) すぐれたる智者

妙法蓮華経方便品に「わたしが究めた真理というものは、仏と仏のあいだでしか理解することのできないものである」（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社、p. 32）とあります。ここから「すぐれたる智者」とは、仏であると推察できます。

3. 世間の人びと

(1) 経文

「『しかるに、この世間の人々は、ただ欲望をたのしみ、欲望をよろこび、欲望に躍(おど)るばかりである。欲望をたのしみ、欲望をよろこび、欲望に躍る人々には、この理(ことわり)はとうてい見がたい』」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p. 484）

(2) 欲望にまみれた人々

釈迦牟尼世尊が世間の人びとを観察しますと、欲望をたのしみ、欲望をよろこび、欲望に躍っています。このような人々が、この奥深い法を理解することなどできるはずもありません。

4. 縁起の法

(1) 経文

「『この理とは、すべては相依性(そういしょう)にして、縁(条件)ありて起るということであり、また、それに反して、すべての計らいをやめ、すべての所依を捨てれば、渴愛(かつあい)つき、貪りを離れ、滅しつくして、涅槃にいたるということである』」（同書、p. 484）

(2) 縁起の法

釈迦牟尼世尊の悟った法は「現象はすべて相依性(そういしょう)である」ということです。「相依性」とは「縁(条件)ありて起る」ということですから「縁起の法」にほかなりません。

(3) 涅槃にいたる

① 「それに反して」の「それ」とは、「欲望」のことです。

「すべての計らい」とは、欲望による計らいです。あれが欲しい、これが欲しいと思うことです。「すべての所依」とは、欲望の拠り所すなわち欲望の対象です。

② 欲望と欲望の対象を捨て、渴愛(自分欲)がすっかりなくなれば、涅槃にいたることができるのです。

(4) 理(ことわり)が理解できない

自分欲にまみれて生きている人々には、「縁起の法」という理が理解できず、「自分欲を捨てれば涅槃にいたることができる」という理も理解できません。

6. 躊躇

(1) 経文

「『もしわたしがこの法を説いても、人々がわたしのいうことを理解しなかったならば、わたしはただ疲労し困憊(こんぱい)するばかりであろう』(続いて同じ内容の偈が説かれます) そのように考えた世尊の心は、躊躇に傾いて、法を説くことには傾かなかった」(同書、p. 484)

(2) 釈迦牟尼世尊の思索

妙法蓮華経には、ここのところが、次のように述べられています。

「もしわたしが、仏の悟りというものだけを賛嘆し、力説したならば、世の苦しみの中に沈み込んでいるおおくの人びとは、とうていその教えを信ずることはできないであろう。そういう人たちに無理に教えを説いても、当然のなりゆきとして、教えを破る罪をおかし、現在よりもっとよくない状態に落ちこんでしまわないともかぎらない。むしろ、わたしがこの教えを説かないほうが、かえって安心(あんじん)の境地に達しやすいのではなからうか」(庭野日敬著『新釈法華三部経2』

佼成出版社、p. 371)

(3) 躊躇に傾く

こうして、釈迦牟尼世尊は、「教えを説いても無駄になるくらいなら、いっそ、説かずにおこう」と思い始めたわけです。

7. 梵天の要請

(1) 経文—梵天の要請

「その時、この娑婆世界の主たる梵天は、世尊の心中の思いを知って、かように考えた。

『ああ、これでは世間は滅びるであろう。これでは世間は滅びるであろう。世尊・応供・正等覺者の心は、躊躇に傾いて、法を説くことに傾いてはいない』

そこで、この娑婆世界の主たる梵天は、たとえば、力ある男子が屈したる腕を伸ばし、また伸ばしたる腕を屈するがごとく、たちまち梵天界にその姿を没して、世尊のまえに現れた。

そして、この娑婆世界の主たる梵天は、一肩(いっけん)に上衣を掛け、右膝を大地につけ、世尊を合掌し、礼拝して、いった。

『世尊よ、法を説きたまえ。善逝(ぜんぜい)よ、法を説きたまえ。この世には眼を塵に覆われることすくなき人々もある。彼らも法を聞くことをえなければ堕ちてゆくであろう。この世には、法を理解するものもあるであろう』(同じ内容が偈で繰り返されますが省略します) (増谷文雄編訳『阿含経典2』

ちくま学芸文庫、p. 485-487)

(2) 梵天の心配

釈迦牟尼世尊が法を説かないほうに傾いたのを見て、梵天は、「これでは世間は滅びるであろう」と心配しました。

現代の世界を見ると、釈迦牟尼世尊の法が全く届いていないと思われる人々の間で、激しい争いが繰り広げられ、人類を滅亡に導きかねない勢いであると感じられます。梵天の心配は当たっているというほかありません。

(3) 梵天の懇願

梵天はすぐさま釈迦牟尼世尊の前に跪(ひざまず)き、この世には、法を理解するものもいると思うから、法を説いてくださいと懇願します。

(4) 釈迦牟尼世尊の心情

ここに述べられている梵天の心配と懇願は、釈迦牟尼世尊の心情を映したものであろうと思われます。

8. 釈尊の再考

(1) 経文＝世間を眺める

「その時、世尊は、梵天の勧請を知るとともに、また、生きとし生けるものへの哀憐(あいりん)によって、仏眼(ぶつげん)をもって世間を眺めたもうた。

世尊が仏眼をもって世間を眺めてみると、そこには、人々の眼(まなこ)の曇りおおきものもあり、曇りすくなきものもあった。利根(りこん)のものもあり、鈍根(どんこん)のものもあった。善き相のものもあり、悪(あ)しき相のものもあった。あるいは、教えやすいものもあり、教えがたいものもあった。またそのなかには、来世の罪のおそろしさを知って生きている人々もあった」(同書、p. 487)

(2) 釈迦牟尼世尊の眼に映じた人々のすがた

釈迦牟尼世尊が改めて世間を観察しますと、そこには「眼の曇りおおきもの、すくなきもの」、「利根のもの、鈍根のもの」、「善き相のもの、悪しき相のもの」、「教えやすいもの、教えがたいもの」、「来世の罪のおそろしさを知って生きている人々」などさまざまな姿が見えました。これらのすがたは、「教えを受け止める力」という観点から見たもののようです。

(3) 経文＝蓮華の譬え

「それは、たとえば、青蓮華(しょうれんげ)・黄蓮華(おうれんげ)・白蓮華(びやくれんげ)のきそい咲く蓮池のようであった。

そこでは、ある蓮華は、水中に生い、水中に長じ、水面よりいはず、水中に沈んだままで育っていた。

またある蓮華は、水中に生い、水中に長じ、水面までいでて、そこでとどまっていた。

さらに、またある蓮華は、水中に生い、水中に長じ、水面をぬけいでて、水に湿(ぬ)れずして立っていた」(同書、p. 487)

(4) 人々の姿の譬え

人々の「教えを受け止める力」がさまざまであることを、蓮華のさまざまな姿に譬えています。

(5) 経文＝再び世間を眺める

「そして、いま世尊もまた、仏眼をもって世間を眺めてみると、・・・(以下、前出の「経文＝世間を眺める」と同文が繰り返されます)」(同書、p. 487)

(6) 世間の人びとの種々相

経文には、「教えを受け止める力」から見た世間の人々の種々相が、念を押すように繰り返されています。

釈迦牟尼世尊は、ほとんど絶望的に見える世間の中に、「教えを受け止める力」のある人を探し求めたのではないのでしょうか。そして、僅かながら存在するという見通しが立ったのであらうと思われまます。

9. 世尊の決断

(1) 経文＝梵天に答える

「そのような世間のありようを見おわって、世尊は、偈をもって娑婆世界の主たる梵天に答えていった。

『彼らに甘露(かんろ)の門はひらかれたり

耳あるものは聞け、ふるき信を去れ

梵天よ、われは思い惑うことありて

人々に微妙の法を説かざりき』」(同書、p. 488)

「それで、梵天は、世尊はわが説法のねがいを容れたもうたと知って、世尊を礼拝して、そこからその姿を没した」(同書、p. 488)

(2) 説法の決断

釈迦牟尼世尊は、熟慮の末に、梵天に答えました。「自分は、法を説く」と。
これを聞いて、梵天は安心して帰りました。

(3) 甘露

甘露とは神々が常用した不死の飲料で、仏の教えに譬えられます。

「甘露の門はひらかれたり」とは、釈迦牟尼世尊によって法が説かれることを言っています。

(4) 耳ある者は聞け

「耳ある者は聞け」とは、これから法を説くから、学ぶ気持ちのある人、聞いて理解できる人は聞きなさい、耳を傾けなさいということです。

(5) ふるき信を去れ

① 戒禁取

「ふるき信」とは、「戒禁取(かいごんしゅ)」のことだと思われます。

庭野日敬師は「戒禁取見」という迷いについて、次のように述べています。

「戒禁は戒律と同じ意味とおもえばよく、取とは執着を意味しますから、戒禁取見というのは、まちがった戒律を信じ、それに執着することです。いいかえれば、〈正しい原因・結果の法則によらずに、まちがった原因・結果の法則を信じ、執着すること〉です」(庭野日敬著『新釈法華三部経3』佼成出版社、p.180)

② 現代における「ふるき信」

現代においても、まちがった原因・結果の法則を正しいものとして信じ込み、人々の心を迷わしたり、世間に迷惑をかけたりする姿を数多く目にします。

私たちは、澄み切った理性でものごとを正しく見極め、正しい原因・結果を見極めることができるようになりたいものです。

1.1. 説法の工夫

(1) 良医治子の譬えから

妙法蓮華経如来寿量品における「良医治子の譬え」に、次のようなくだりがあります。

「父(仏さま)は子どもたち(衆生)が苦しんでいるのを見て、よく効く薬草の、しかも色・味・香りのいいものを選んで、飲みやすく調合して、子どもたちにあたえました」(庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社、p.159)

この薬は、釈迦牟尼世尊が人々のために説いた法にほかなりません。釈迦牟尼世尊の説法には、子(衆生)の病気を治したい(苦悩から救いたい)と願う親(仏さま)の一心が込められ、さまざまな工夫がなされているのです。

(2) 阿含経で説かれる教え

阿含経では、主として、次のような教えが説かれています。

- ・ 四つの聖諦
- ・ 中道（八つの聖なる道）
- ・ 十二支縁起
- ・ 無常・苦・無我
- ・ 五蘊（色・受・想・行・識）
- ・ 六処（眼・耳・鼻・舌・身・意、色・声・香・味・触・法）

(3) 三乗

妙法蓮華経には、修行者を声聞・縁覚・菩薩に分けて三乗とし、声聞を求める者には四諦、縁覚を求める者には十二因縁、菩薩のためには六波羅蜜を説いたと記されています。

(4) 一仏乗

妙法蓮華経に「方便力を以って、一仏乗に於て分別して三乗と説きたもう」とあります。

「仏の教えを、修行する人々の資質に応じて三つに分けて説くけれども、三つとも、仏の悟りを得るためのただ一つの道なのだ」と言っているわけです。